



Data

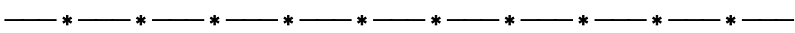
監督・脚本：熊澤尚人
 原作：沼田まほかる「ユリゴコロ」
 (双葉文庫)
 出演：松坂桃李／吉高由里子／松山ケンイチ／佐津川愛美／清野菜名／清原果耶／木村多江

👁️👁️ みどころ

“ユリゴコロ”とは“抛りどころ”。そして、吉高由里子演じるヒロインは、人間を殺すことがその“抛りどころ”らしい。沼田まほかるの原作は“まほかるブーム”を巻き起こしたそうだが、そんなクソ難しいテーマが映画に！しかし、その「容赦ない愛の物語」の展開は・・・？

冒頭から始まるナレーションとその映像を見ているだけで、大きな違和感がある。しかし、これが現実だとしたら？他方、恋人の失踪に始まる物語が展開する中、この青年は自己の“ユリゴコロ”を自覚し、発露していくことに・・・。

本作はネタバレ厳禁！2つのストーリーの展開が後半からクライマックスにかけていかに結びつくのかを予想できれば、あなたのカンは大したものだが・・・。



■□■ “まほかるブーム”とは？容赦ない愛の物語とは？ ■□■

本作のチラシには、“まほかるブーム”を巻き起こしたあのベストセラー・ミステリー小説が待望の映画化！と書かれている。しかし、“まほかるブーム”って一体ナニ？また、ベストセラーミステリー小説って一体ナニ？それは、第14回大藪春彦賞を受賞し、2014年本屋大賞にノミネートされた、沼田まほかるが書いた小説「ユリゴコロ」のことらしい。ちなみに、公開直前の新聞広告では、「待望の映画化！ミステリーの常識を覆す容赦ない愛の物語！」の文字が躍っていた。

また、私は「ユリゴコロ」と言う小説も、それを書いた沼田まほかると言う作家の名前も知らなかったが、その新聞紙上では私も知っている著名作家を含む各氏から、次のよう

な絶賛の声が載せられていた。すなわち、桐野夏生氏「こんな不思議な小説は初めて読んだ。恐怖や悲しみが、いつの間にか幸福に捻れていく。」千街晶之氏「法や倫理を完全に無視した、だがそれ故にどこまでも純粋——そんな愛情を描くことで善悪の彼岸を垣間見せてくれる、いかにも著者らしい迫真の力作だ。」吉野仁氏「秘められた家族の謎が明らかになるとき、驚愕せずにはおれない。胸をえぐるようなすごみをたたえた傑作だ。」大沢在昌氏「計算し尽くした上で、読者をも企みにはめる、恐ろしい書き手である。」

しかし、そもそも「ユリゴコロ」って一体ナニ？そして、「ミステリーの常識を覆す容赦ない愛の物語」とは、一体どんな物語？

■□■映画ではノートは1冊！登場人物も2人カット！■□■

映画化不可能！もしくは、映画化困難！と言われる小説は多い。きっと本作はその一つであり、かつその代表格だ。映画は約2時間にまとめなければならないため、小説に登場する人物を削ったり、一部のストーリーを省略することがよくあるが、本作もそうらしい。そもそも原作では「ユリゴコロ」と題するノートは4冊もあったそうだが、映画では1冊だけだ。また、原作は亮介（松坂桃李）の一人称で進むそうで、それは映画でも概ね同じだが、亮介が発見した「ユリゴコロ」と題するノートを現実にナレーション的に語るのは、それを実際に書いた女性美紗子（吉高由里子）だ。そこらあたりは映画ならではのテクニクでうまく観せてくれるので、本作はそのノートに書かれている冒頭の「私のように平気で人を殺す人間は、脳の仕組みがどこか普通と違うのでしょうか。」のナレーションから不気味さがいっぱい！またミステリー色がいっぱいになっている。

もっとも、①突然、亮介の恋人の千絵（清野菜名）が行方不明になること②亮介の父親が末期ガンと診断されること③そんな状況下で亮介が父親の家にあったノート「ユリゴコロ」を偶然発見し、読み始めること、というストーリーの構成は原作も映画も同じだが、映画では小説における重要な人物が2人省略されているらしい。その1人は美紗子の妹のえみ子、もう1人は亮介の弟の洋平だ。しかし、本作を観ている限り、この2人の人物の省略には何の違和感も感じないから、本作の脚本作りに長い日数を費やしたと言う熊澤尚人監督の構成力に拍手！

■□■美紗子の“ユリゴコロ”は？その自覚は？その発露は？■□■

日本には刑法と少年法がある。そして、「刑事未成年」には刑事罰を問うことができず、少年法によって保護処分が下される。たしかに、幼い頃的美紗子がお友達女の子を無慈悲に殺すシーンを観ていると、それはある程度やむを得ないと思える面もあるが、高校生になってからの美紗子のかかなり自覚的な犯行を観ていると、いささか少年法の存在に疑問も湧いてくる。しかし、スクリーン上で見る幼い頃的美紗子の犯行（殺人鬼ぶり）は、ユリゴコロの不足によるものらしい。そして、そんな犯行をくり返していくうちに、どうも

人間を殺すことが自分の“拠りどころ”になっていることを美紗子は自覚していくわけだが、それは何よりも自分自身が一番つらいことだろう。

犯罪者のモノローグを基調とする小説や映画は多いが、本作では、少女時代の殺人について何も罪に問われないまま成長した美紗子がレストランで働いている時、自分で自分の手首を切ることに快感を見出す女性、みつ子（佐津川愛美）とお友達になるストーリーの中で、更に不気味さを増していく。そんな異様な生活の中でも、自分の“ユリゴコロ”によって自分に言い寄ってくる男に対して必然的に引き起こす殺人事件等を経て、今や美紗子はまともな社会では生きていけない娼婦に堕ちていた。本来ならこれで美紗子の人生は終わりになるはずだが、そこで美紗子が出会った奇妙な男が洋介（松山ケンイチ）だ。娼婦の美紗子から声を掛けられた洋介は、何の代償も求めず、5000円を手渡した他、食事を御馳走し（といっても、うどんだけだが）更に何と妊娠していた美紗子と結婚し、お腹の子供の父親になることまで承諾したからビックリ！

世の中にめったにいない、こんな男に、美紗子が巡り合えたことは最大の幸運だったはずだ。「女の一生」は林芙美子の小説『放浪記』や杉村春子が一生涯演じ続けた劇団文学座の舞台『女の一生』等、さまざまな形で描かれているが、これにてやっと美紗子の「女の一生」も幸せが確定！スクリーン上の展開を観ていると一瞬そう思えたが、さてその後のこの2人の運命はどうか・・・？

■□■恋人の失踪と細谷の登場がストーリーの核に■□■

本作冒頭に登場するのは、レストランのオーナーとして楽しそうに働いている亮介（松坂桃李）。婚約者の千絵を父親に紹介している姿は、順風満帆そのものだった。ところが、ある日、父親の家で“ユリゴコロ”を読んだところから、亮介の心の中にさまざまな違和感が生じてくることになる。さらにある日、急に千絵が失踪してしまい、かつて千絵と一緒に働いていたという女性、細谷（木村多江）が登場してきたところから、彼の生活は大きく変わっていくことになる。

もっとも、本作を見ている限り、婚約までした千絵が急に失踪したというのに、亮介は警察に失踪届も提出していないのは不可解。情報化社会の今、警察の捜査があれば、細谷が亮介にもたらした情報くらいはすぐに警察で収集できたはずだ。細谷が亮介にもたらした情報は、①千絵はもともと結婚していたこと、②その夫はヤクザだったこと、③そこでさまざまな悲劇が起り、そこから逃げ出してきた千絵は亮介に出会ったこと、④そのヤクザに居所を突き止められた千絵は、脅されて今ヤクザの元に戻っていること、等だ。それなら亮介がこれからでも警察に千絵の捜索を依頼すれば、千絵の発見は容易なのでは？弁護士の私はすぐにそう思うのだが、それではミステリー小説の展開にはならないから、本作のストーリーはあくまで、細谷からの情報を元に進んでいく。細谷役を演じる木村多江は『ぐるりのこと。』（08年）『シネマルーム19』（341頁参照）、『夢売るふたり』（1

2年) (『シネマルーム29』61頁参照) 等での繊細な演技が持ち味だが、本作でも出番は少ないもののストーリー展開をリードするミステリアスな役柄を見事に演じている。

しかして、本作後半からクライマックスにかけては、細谷があつと驚くキーマンであったことが判明するので、それに注目。

■□■2つのストーリーはどこで結びつくの?■□■

本作はタイトルからわかる通り“ユリゴコロ”と題された恐ろしいノートがポイント。したがって、一方の主演はその書き手である女性、美紗子。“ユリゴコロ”を朗読する美紗子のナレーションに従って、スクリーン上では前述したおどろおどろしいストーリーが展開していく。これを見ていると、殺人事件なんていとも簡単に起こせるし、犯人逮捕もままならないものだということがよくわかる。そして、その度に殺人犯である美紗子は自分の“ユリゴコロ”(=抛りどころ)を確認しつつ、少しずつ破滅の人生を歩んでいくことになる。

他方、そんなユリゴコロをテーマとしたストーリーとは全く別に、当初は明るく前向きだった亮介の、後ろ向きなストーリーがスクリーン上では同時並行的に描かれていく。もっとも、父親の末期ガンの告知は世の中でもよくあることだが、千絵の失踪とそれについて細谷からもたらされた情報というストーリー構成は極めて特異なもの。何故、亮介がそんな騒動に巻き込まれていくのかが不思議だが、それはひょっとして亮介がユリゴコロと題されたノートを読んだことと関係があるの?そして、千絵の所在は発見できるの?本作前半では全く別モノとして展開していくこの2つのストーリーは、一体どこでどう結びついていくの?“ミステリーの常識を覆す容赦ない愛の物語”を売りにした本作では、ネタバレは厳禁!細谷からの情報を元に中盤からクライマックスに向けて展開していくストーリーの中では、さて、どんな真相が明らかになっていくのだろうか・・・?

人間は生まれてくる両親を選ぶことができないもの。したがって、その体の中を流れる血も両親のものを受け継がざるを得ないもの。松本清張の原作を、野村芳太郎監督が映画化した名作『砂の器』(74年)にも、そんな根源的なテーマが描かれていたが、それは本作も同じだ。しかし、美紗子が人間の死をユリゴコロ=抛りどころとする人間であったとしたら、その血を受け継いだ子供も同じような人間になるの・・・?いやいや、そんなことはない。そう言い切れればいいのだが、さて・・・?

2017(平成29)年9月27日記